

田口佳史が語る東洋思想：東洋思想から東アジアと世界を見る

キーワード：田口佳史、横井小楠、勝海舟、佐久間象山

概要：政治は一步間違えれば国民に大きな災いをもたらすことを肝に銘じるべきで、政治家も国民も決して偏った考えを持たず、この問題に真剣に持続的に関心を持つことが最も重要である。また、教育も卓越な国家理念に基づくものでなければならない。横井小楠の国家観を以て説明しよう：「世界一の博愛国家となり、天に代わって世界の人々のために働き、世界を助けることのできる国家となり、全世界に大義を広げよう」。

人間としての誇りを以て、他者を尊重することこそ、大義というものではないだろうか。

昨年、縁あって、日本の著名な東洋思想研究家である田口佳史先生にインタビューする機会を得た (<http://www.infzm.com/contents/224400?source=131>)。掲載後、多くの読者が面白いと感想をよこしてくれ、筆者も励まされた。この間、田口先生の江戸時代の教育に関するニュースレターを読んだ後、先生の同僚にその感想を話したところ、再度インタビューを行うことを提案され、筆者は即座にそれを引き受けた。というのも、この一年間書かれた田口先生のニュースレターは、私たち中国人とも関係の深い東アジアの国際情勢に何度も触れているからだ。新しい冷戦の暗雲が立ち込めている今、日本国内から主流のメディアと違う声を届けることは有意義なはずで、このたび田口先生への二回目のインタビューを実施したわけである。

王：昨年のインタビューで、田口先生は勝海舟と血がつながっているとおっしゃいましたが、私は以前『南方週末』に海舟についてのエッセイを寄稿したことがあります (<http://www.infzm.com/contents/129707>)。十数年前に、たまたま『氷川清話』を読んだのがきっかけで、この巨人にずっと興味を持っていますので、今日は海舟についてまず少しお聞きしたいと思います。『氷川清話』に収録された海舟晩年の東アジア観のいくつかがとても印象に残っているからです。十九世紀の末期、海舟は日本が中国や朝鮮と友好的に共存し、共に発展していくべきで、欧米列強の膨張主義的な道を歩んではならないと指摘しました。彼の先見の明は、半世紀後に証明されました。戦後、作家の坂口安吾は「海舟こそ近代日本最大の政治家である」と言い、坂口と交流のあった歴史作家半藤一利も海舟のファンで、坂口の見方に強く賛同し、海舟の先見の明を何度も著作で取り上げて賞賛しています。中国でも海舟に興味を持っている人が最近増えているのですが、残念ながら海舟の作品の中国語訳はありませんから、海舟についてのご意見を伺いたいと思います。

田口：先ほどあなたが言った東アジア観ですが、それは晩年の海舟の見解です。それに関しては、彼は主に横井小楠の影響を受けたと思います。海舟が最も尊敬する人物は二人いて、

一人は西郷隆盛で、もう一人は横井小楠と言ったのはご存じでしょう。

江戸無血開城を到達点に、海舟の生涯を十年単位で分けて説明することができます。十代で剣術の修行を始め、十八歳で座禅を組みました。二十代にはいと、兵学など西洋の学問を学ぶためにオランダ語を学び始め、正に文武両道を学びました。このような土台の上に立って、三十八歳の時、咸臨丸艦長としてでアメリカへの遠征を行い、西洋社会を直接観察し、理解することができたのです。同じ船には、後に有名になった福沢諭吉が乗っていました。四十六歳の時、西郷隆盛とともに江戸の無血開城を決意し、徳川幕府の支配を平和的に終わらせ、日本を内戦から救った海舟は、彼の人生の頂点を迎えたのです。これがなかったら、海舟はこんなに有名になっていなかったかもしれません。彼は七十六年間生き、無血開城後の三十年間は政治の最前線から遠ざかっていました。『氷川清話』は、晩年の時事問題に対する考え方や、人生の反省と総括について、度々話した記録です。

海舟は学問にも力を入れましたが、彼は学究ではなく、主に実践を通してその思想を磨いたもので、私が常々「活学」と提唱しているものです。特に、彼の剣術の修行の影響を挙げたいと思います。剣術を学ぶ上で、瞬時の判断は非常に重要です。これが生死を分けるカギとなるので、後年の彼の政治行動にも大きな影響を与えました。

海舟の生涯を知れば、危険と隣り合わせの修行、特に敵のいる環境で能力を磨いた偉大な人物であったことがわかります。ご存知のように、後に海舟の弟子となる坂本龍馬も海舟を暗殺しに来た人です。この様に海舟は何度も暗殺されそうになりましたが、間一髪で助かりました。これらの経験は彼の人生に大きな影響を与えたと思います。

後で江戸時代の教育について話しますので、ここではとりあえず簡単に紹介しましょう。当時の武士階級は、幼い頃から古典教育を受けるのが普通で、それは主に中国の古典を読むことでした。貧しい家の子たちは、社会で名を上げるためには、武術を学ぶか、学問を修めるかしかなかったのです。海舟は家が貧しく、読む本も豊富ではなかったのですが、幸運にもある有力者に出会って本を買ってもらい、熱心に勉強して基礎を築くことができました。当時、お金持ちが貧しい家庭の子どもたちに本を買ってあげることは珍しいことではありませんでした。江戸時代に優秀な人が多かったのは、実は貧しさと関係があって、社会でしっかり足場を固めるためには、勉強しなければならなかったということを強調したいですね。

王：海舟は学者ではなかったとおっしゃいましたが、確かにそうです。書物の勉強ばかりするような学者ではなく、彼自身が『氷川清話』で強調しているように実践者でしたが、それでも思想家と呼べるかもしれませんね。筑摩書房が約半世紀前に出した『近代日本思想大系』は福沢諭吉や西田幾多郎など日本を代表する思想家を全て網羅していますが、海舟の一卷も企画されたそうです。これは彼が思想家として認められていたことを示していますね。さっきおっしゃった晩年の思想は、私も横井小楠の影響を受けていると思います。

田口：はい、ご判断はごもっともですが、もう一人追加します。佐久間象山です。この二人は後の維新の志士たちに大きな影響を与えた人物ですが、海舟をはじめとする志士たちと違って、攘夷派ではありませんでした。佐久間は年上ですが海舟の義弟で、二人の関係は深かったのはご存じの通りです。特に横井小楠は海舟に大きな影響を与えたので、この二人について、お話ししましょう。

私は五年前に『横井小楠の人と思想』という本を書いて、その思想の素晴らしさを明らかにしました。また、この二年間は、日本語、英語、中国語で公開されるブログを毎月一本ずつ書き、そのなかで横井小楠の思想の解説をかなりしてきました。彼の思想は非常に興味深く、現代にとって極めて重要だと考えているからです。彼は江戸幕府の末期に新しい日本国家の構想を提案し、一五〇年前にすでに日本の進むべき道を設計したと言えますが、残念ながら彼は構想を完成させたところで暗殺され、明治の日本は彼の構想に従わなかったのです。

佐久間に関しては、私は三年前に彼のことを書いた本で、その思想がこの大転換の時代に私たちに何を教えてくれるかについて書きました。

横井も佐久間も儒学者、朱子学者であり、儒家の言う「格物致知」、つまり知識の追求を非常に重要視していました。彼らは西洋には西洋の合理性があり、それを正しく理解すべきであり、最初から武力による対決をしてはいけないと考えていました。なぜならば、それでは戦いが尽きないからです。また、横井や佐久間は東洋の思想を使って西洋の思想を包摂すべきだと提唱し、西洋による東洋への進出は、その西洋文明に思想で応えるべき知的挑戦と理解すべきとしていました。当時、このように思考できた人は非常に少なかったのです。

王：私は日本の東洋思想研究への興味から、先生の論文や著作をいくつか拝読しました。デカルトに代表される近代西洋哲学思想に対する批判には共鳴しましたが、近代性を研究してきた私としては、近代西洋思想の貢献を一概に否定することはできないと考えています。デカルトの理性主義に代表される近代西洋思想の限界について言及されているのを見て、最近読み終えたばかりの本、ウィトゲンシュタインの弟子で有名な哲学者、スティーブン・トゥールミンの『近代とは何か:その隠されたアジェンダ』(*Cosmopolis: The Hidden Agenda of Modernity*)を思い出しました。彼はその著書の中で、西洋の近代は実はデカルトに代表される合理主義の伝統と、モンテーニュに代表されるルネサンスの人文主義の伝統という二つの源泉を持っていると言っています。その後、ヨーロッパの宗教戦争がもたらした大きな破壊のために、誰もが混沌から立ち上がるための明確な思想を求めたので、デカルト的理性主義に向かい、具体性、不確実性、多元性を重視する人文主義を次第に忘れていったのです。トゥールミンの見解では、このことがデカルト的近代性によって引き起こされた多くの問題の根源です。これはフランクフルト学派の啓蒙主義批判に似ていると同時に、より壮大な視座を持った興味深い指摘です。もちろん、田口先生も繰り返し述べているように、東洋思想が西洋近代思想と補完関係にあり、西洋思想の欠点を克服するのに役立っています。ですから、

トゥールミンの著作を読んだ時、先生のデカルト主義批判がすぐに思い浮かんだのです。

田口：私もトゥールミンの本を読み、彼の主張に賛同し、いろいろと影響を受けてきました。人文思想の観点から見れば、ルネサンスの人文主義だけが改めて注目されるべきではなく、儒教を含む東洋の人文主義も有用であると言いたいのです。私の考えでは、横井の思想は東洋のヒューマンイズムの重要な一環を成しています。横井の儒教（朱子学）の解釈の見事な深さは、学識と洞察力に優れているだけでなく、幕末の思想家として全宇宙のすべてのものの本質と関連性について鋭い解釈を与えた稀に見る人物であり、気高い人格者でもありました。横井は世界平和を願い、世界平和と国家の繁栄は共存できると主張した一人です。彼は、すべての国は「セクト主義」の発想を持ち、それぞれが誠意と慈悲に満ちた道徳的基盤を持たず、自己の利益だけを追求しているため、天下を思いやることができず、最も公正で公平である天の原則に従うことができないと鋭く指摘したのです。

横井の特徴的な言葉である「割拠見」とは、自国を第一に考える立場を意味します。今風に言えば、「自国ファースト」ですね。そう考えてしまうと、どうしても自分の利益ばかりを考えてしまい、他人や他国のことを心の底から思いやる「誠意・思いやり」が持てなくなります。その結果、天のように広い心を持つことも、思いやりの心を持つことも、公平無私原則を守ることでもできなくなると小楠が述べたのです。

言い換えれば、イギリスにはイギリスの、ロシアにはロシアの自国至上の考え方があり、それぞれの国にそのような主張があるからこそ、戦争が起こると苛烈なものになると言っています。小楠はこれが国益中心主義の結果だと言っているのです。したがって、「国益中心主義」が平和主義・非戦論の最大の敵であることは間違いないでしょう。戦争に終止符を打つには、この「分断」をいかに克服するかにかかっていると云えます。

小楠は近代西洋文明を分析する中で、「西洋近代の学問は事業の学問であって、心や道徳の学問ではない。したがって、紳士も悪人もなく、優劣もない。商売の学問しかないから、商売はますます発展する。しかし、徳の学問がないから、人情がわからず、交渉は利益に縛られ、結局戦争になる。戦争が起きても、利益に縛られたままなので、戦争が終わると賠償と和解をする。人情を知っていれば、戦争を止める方法があるはずである」と言っています。

いうまでもなく、ここでいう西洋とは地理的な概念ではなく、近代西洋思想の価値観や思考法を指しています。小楠は近代西洋の学問はあくまでも「事業の学」であり、「事業」とは生産と利潤を目的とする経済活動を意味すると言ったのです。「心・徳の学」とは、人間のあり方を考える学問であり、人格や精神の手本を学ぶことに重点を置いた学問ですが、近代西洋の学問にはそうした内容が欠けています。事業を資本主義の経済活動として理解することは、きっと私利私欲だけを追求することになるでしょう。もし、心と徳を学ぶことで人間の優しさを知り、「利他主義」が長期的な友好関係の基礎であることを理解できれば、常に圧力や強制に頼るのではなく、譲歩して妥協することを選ぶようになり、争いや殺生を防ぐ心の徳や人間の優しさが生まれると小楠は言っているのです。

「人新世」と呼ばれる現代は、経済成長モデルが問われ、貧富の差や地球環境問題、気象異変など、世界を悩ませているだけに、小楠の言葉はますます傾聴に値すると思います。小楠は新しい時代に向けて、地球上のすべての生命が真の平和のうちに生きるためのいくつかの提案をしています。その中でも特に重要なのは次の命題です。「大義を四海（世界）に広げるのみ」ということです。大義とは何か？偉大なる地球、世界の多くの仲間に感謝の気持ちを表し、人間であることに誇りを持ち、他者を尊重し、他の生き物の生存を世話することを日常生活の中で行うことが大義ではないでしょうか？この偉大さを世界の四方に広め、広く世に知らしめることが、人間とその国の義務ではないでしょうか？これが時代を超えた小楠の主張です。このように、小楠は「天の公義」を忘れてはいけないと言ったのです。公とは「天の公」です。そうすれば、自国の利益だけで考える「割拠見」に陥ることはありません。自国の利益だけを追求すれば、他国からの信頼を失い、さらに言えば、地球そのものが取り返しのつかない致命的な状態に陥ってしまうからです。その場合、自分の国はどうすれば生き残り、発展できるのでしょうか。数年前、アメリカの前大統領が「アメリカ・ファースト」と言ったことは、まさに小楠が批判したような過ちを犯しているのです。

中国は儒教の故郷であり、東洋思想の主な発祥地でもあり、悠久の歴史を持っているだけでなく、現在急速に発展している世界の主要国です。貴国が孔子や孟子の築いた偉大な伝統を維持し、「大義を四海（世界）に広める」ことで、必ずや世界のためになることを心から願っています。その点では東洋思想は豊富な資源を有しています。東洋思想は近代以来、西洋思想のために、あまりにも長い間放置されてきたのですから、そろそろ私たちが声を上げるべき時期でしょう。

海舟の義弟の佐久間も同じような考えで、西洋の科学技術を利用する際には、東洋の道徳が指針となり、何事も間違えないようにすべきだと強調したのです。彼は小楠と異なり、砲術やガラス工芸など西洋の科学技術を専門とする洋学者でもありました。儒教の弱点は科学技術が発達していないことにあると考え、儒教の伝統を学びながら、西洋の科学技術を正しく吸収し、東西の文明が持つそれぞれの長所を融合させることを提唱したのです。「東洋の道徳、西洋の芸術」（芸術とは科学技術のこと）という彼の主張は有名です。彼は西洋の科学技術は、東洋の道徳思想に導かれなければ、真の力を発揮できないと考えたのです。

王：先生の『横井小楠の人と思想』を読ませていただきましたが、当時の国民国家を超えた思想を打ち出したことは、確かにすごいことだと思います。彼は日本の独立を重んじましたが、日本という国を超えた価値、つまり先生の言う「天下の公理」、地理的な区別を超えた真の普遍性を求めたのです。というのも、彼と佐久間は西洋列強が東洋の国々に対して進めている帝国主義的な政策を問題視していたからです。十九世紀の西洋では、民主主義を推し進め、『アメリカの民主主義』を著したフランスの思想家トクヴィルでさえ、そのような偏見から逃れることはできず、白人文明の最良のものを世界に広める方法としてフランスの植民地主義を支持しましたので、横井の思想と対照的です。

残念ながら、明治政府は横井や佐久間の考案した道を歩まず、欧米列強と同じ道を歩んだので、後の歴史の展開が横井や佐久間のビジョンがいかにか先見の明があったかを証明したわけです。ここ数年、横井の思想の重要性を強調されているとのことですが、特に現在の世界情勢に鑑みると、それはよくわかります。おそらく横井は時代に先駆けて思想が成熟し、その影響を強く受けた海舟と同じように、当時の政治家に採用されることはなかったのでしょう。しかし、今となって、彼らの先見の明が痛いほどよくわかります。ここ数年、小楠の思想解釈に心血を注いでこられたのは、きっと時代の刺激があったからでしょうね。

田口：はい、そうです。残念ながら、明治維新が始まる直前に佐久間が、明治維新の初めに横井がそれぞれ暗殺されたことも、彼らの思想の受容に影響を与えています。今、彼らの思想を振り返ると、人類が多くの危機に直面し、その危機が切迫している現代において、極めて重要な意味を持つことがよくわかるのです。

王：このインタビューの準備のために、『日本の名著』に入っている松浦玲編集の「佐久間象山・横井小楠」巻を読みました。松浦玲さんは何年か前に1000ページほどの分厚い勝海舟の伝記を完成させているのはご存じだと思いますが、約半世紀前に出版されたこの本の解説で松浦は、横井と佐久間は幕末の政治の現実を通して西洋近代文明の問題を見抜き、堯舜の道を以て、西洋文明の問題を解決できると考えていたと述べています。松浦は当初は懐疑的であったと言っていますが、しかし、近代化によって引き起こされた諸問題——当時のヨーロッパ、アメリカ、そして日本ではっきりと目に見えていたのですが——を目の当たりにして、横井や佐久間の思想が未来志向であることに気づき、おそらく我々を救うことができる思想は彼らが体現する儒教、ひいては東洋思想全体ではないかと考えはじめたと言っています。

最近、田口先生が江戸時代の教育についてニュースレターで書いているので、拝読しながら、古代中国の教育を思い起こさせました。現代ではその多くが封建的なものとして否定されていますが、儒教などの東洋思想しかなかったにもかかわらず、古代には驚くべき人物が多く出現したことを認めざるを得ません。白川静という文字学と漢文学の大家が、中国の古典を学ぶことは大人になるための必要な通過点で、中国の古典をマスターする方法は、おっしゃった素読と暗記であり、そうしなければ本当の意味で自分の教養にならないと言っていたのを覚えています。

田口：そうなんです。わかりやすくするために、江戸時代の幼児教育について、いくつかのポイントに分けて説明します。

まず、胎教が非常に重視されました。知的で優秀な人材がいなければ、確かに良い社会は成り立ちません。そこで、子供を優秀な人間に育てるために、胎教を行う必要があります。昔は社会全体で子どもを「社会の宝」として育てていたわけですから、少子化の問題を抱え

る現代社会では、なおさら重要だと思います。

三歳頃から六歳頃までは「四端」と呼ばれる教育が重視され、江戸時代にはこの早期教育を「四端教育」と呼びました。この四端は人格形成の四要素です。慈愛の心は「仁」、義愛の心は「義」、辞讓の心は「礼」、是非の心は「智」となります。「仁・義・礼・智」という四つの徳があり、この徳を持って人に接すれば、相手の心の中に「この人は信頼できる」と思うようになり、五常と呼ばれる「仁・義・礼・智・信」をもって、相手もそれに応えようとするのです。相手と接する時に、「仁・義・礼・智」の四つの徳がなければ、「信」を得ることはできません。自分の振る舞いに「徳」があってこそ「信」が得られることを知らなければ、「信なくば立たず」と言っても、「信」は得られないのです。

「仁・義・礼・智・信」の五常を現代社会の文脈で考えてみると、この価値観は「学(問)政(治)一致」という考え方に強く根ざしていることに気づきます。そして何よりも「より良い社会」を目指すという意志が前提となっており、それは人生における志を達成するためにも必要不可欠なものです。同時に、「よりよく生きたい」と願う人々の志を実現し、その努力が報われる社会を築くために、「教育と政治」の関係に着目し、幼児教育の具体的なカリキュラムに「学政一致」の理念を真に組み込んでいく必要があると思います。

政治が国民にとって大きな災いとなりうることを念頭に置き、政治家も国民も偏見を持たずに、この問題に真剣かつ持続的に取り組むことが必要です。また、教育も優れた国家理念に基づかなければなりません。横井小楠の国家構想で説明すると、「世界第一の仁義の国家となり、世界の人々のために、天のために働き、世界を救うことのできる国家となり、全世界に大義を広げる」ことです。

今の日本の幼児初等教育には、多くの問題があると言わざるを得ません。最も強調すべき点を挙げるとすれば、私がこれまで言ってきた江戸時代の教育の学ぶべき点、「人間教育の早期開始」でしょう。

江戸時代の素読は三歳くらいから始まり、『大学』『論語』『孟子』『中庸』の四冊を何度も何度も音読し、52,623字すべてを暗唱させたのです。これを一年半から二年かけて行うことができます。「門前の小僧習わぬ経を読む」という言葉がありますが、これはよく聞き、よく読めば、習わなくてもわかるようになるという意味です。これは幼児特有の能力を最大限に生かした画期的な教育法です。しかし、さらに強力なものがあります。

六歳で藩校や寺子屋に入ると、その日から52,623字の意味を説明することになるのです。声に出して暗唱することはできても、その意味がわからないから、一字一字解明していくのです。意味がわかったとき、子どもたちは驚きました。自分たちが暗唱した文章が、こんなにも素晴らしく、面白いものだと知って、子どもたちは大変驚いたわけです。「人とは何か」から「人生の要点」まで暗記したことに感動もしたのです。黒船来航のような国家の大危機を救える人がたくさんいたのは、江戸時代の教育が充実していたからだと思います。

王：私は西洋哲学を中心に研究していますが、「観照脚下」の重要性も認識しております。

中国の歴史上の人物では清朝末期の重臣曾国藩を特に尊敬しています。彼の家訓は中国で非常に有名ですが、そこに書かれている教育理念は、先生のおっしゃることと多くの点で非常に一致しています。彼が道德、功名、文芸の面であれだけの成果を上げることができたのは、もちろんこの儒教的な教育と切っても切れない関係にあったのです。時代が変わり、江戸時代と同じような教育はできませんが、継承していくべき価値のある考え方は、確かにたくさんあると思います。

最近、森鷗外と夏目漱石の本を読んで、江戸時代の教育の到達点を示していることに驚かされました。鷗外は七歳で漢文を学び始め、留学中の日記の中には漢文で書かれたものもあります。一方、漱石はイギリスに留学する前、文学とは左伝、国語、史記、漢書だと考えていました。漱石も鷗外も漢詩をたくさん書きましたが、今の中国古典の研究者は、彼らに追いつかないと思いますね。このごろ『渋江抽斎』や『鷗外随筆集』を読んでいます、鷗外こそ東洋文明と西洋文明の集大成のような気がしますね。

田口：そうですね。鷗外の史伝はとても面白いですね。『渋江抽斎』以外にも、『伊沢蘭軒』や『北條霞亭』などもあり、どれも読み応えがあります。私は若い頃、森鷗外の全集を買って読みあさり、とても憧れたものです。彼は単なる文学者ではなく、今話したような東洋と西洋の知を融合させた偉人だったのです。

『左伝』の話をされましたが、確かに古典的名著で、面白い文章がたくさんあります。例えば、子産のような優れた政治家についての論考は傑作です。また、『史記』も私は大好きで、何度か慶應義塾大学の社会人向け教育機関に招かれて講義をしています、何度読んでも面白い歴史の名作です。

王：そういえば、文学青年から文章を上達させるにはどうしたらいいかと聞かれたとき、鷗外は『春秋左氏伝』を繰り返し読めと答えたそうです。鷗外がいかにかこの古典を高く評価していたかがよくわかりますね。

ご著書の中で、現代社会は東洋と西洋の知を融合させて、人類が直面する危機を解決すべきだと提唱していますね。鷗外も西洋と東洋の両方の学問を吸収し、二本の足で歩くことの必要性を繰り返し説いています。

ところで、去年は日本と中国の古典をいくつか紹介していただきましたが、このインタビューの最後に、中国の読者に新たにお薦めいただきたいと思いますが、いかがでしょうか？

田口：もちろん、喜んで。まず、王陽明の『伝習録』をおすすめしたいのです。特に「顧東橋へ答える」の中に出てくる「抜本塞源論」を読んでほしいです。この文章は、今読むのに非常に適切なものです。次に、江戸時代の商人出身の思想家である石田梅岩が五十五歳の時に書いた名作『都鄙問答』を推薦したいです。この本で石田は生産と流通の社会的役割を高く評価し、利潤追求の正当性を主張しています。マックス・ウェーバーより一世紀ほど前の

日本の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』ともいうべき著作です。石田は神道、儒教、仏教、老荘思想などを学んでおり、その思想は三教帰一の「帰一」精神を体現しています。三冊目は、何度も読み返したロバート・ベラーの『徳川時代の宗教』です。ベラーは徳川時代の宗教について世界で最もよく研究した社会学者であり、石田梅岩の心学を高く評価しています。ご存知のように、ベラーはウェーバーを翻訳した社会学者パーソンズの高弟で、徳川時代の宗教を非常に高い水準で研究した大学者です。

王：つい最近知ったばかりですが、ベラーも田口先生と同じように、先ほど言ったトゥールミンの仕事を高く評価して、『近代とは何か』はモダニティとポストモダンに関する最高の研究書だと言っていますよ。ベラーは亡くなる少し前に東京大学で講演されたので、私も聞きに行って、彼の親友丸山真男のことについてしばらく話すことができました。また、最晩年に出版した『人類進化における宗教』では東洋思想にも言及していますね。

このたびはお忙しい中、二時間もかけて中国の読者のために興味深い話をたくさんしてください、また新たに名著をご推薦くださって、本当にありがとうございます。中国の読者にもきっと先生の苦心と忠告が伝わると思います。こうした交流こそ、日中間の真の理解を深めてくれるものと信じています。

インタビュアーの補足

昨年のインタビューに比べ、今年は田口先生の世界平和を思いやる気持ち、特に東アジア情勢への懸念をより強く感じた。約一年前のブログには、子供の頃に体験した東京大空襲を思い出し、最近では B29 の轟音が耳元に響いているようなことが書いてあった。幼い頃に戦争を体験し、その残虐性を目の当たりにした彼は、東洋思想の研究と普及を通じて、その原因を根本から断ち切りたいと考えており、最近の西洋思想に対する批判もそうした懸念から来ているところがある。田口先生はインタビューの中で、特に儒教や道教などの東洋思想の発祥地である中国が世界で果たすべき大きな役割について言及しており、我が国に対する深い期待に心を打たれた。また、コロナ禍が流行っていた頃は『尚書』や『大学』を読み直し、二冊の解釈本を執筆するなど精力的に仕事を続けて、東洋の古典を愛する姿勢も感動的だった。

田口先生は決して西洋思想を頭から否定するような保守主義者ではなく、その近代西洋思想への批判が深い学識に基づいていることは、インタビューを読んだ読者は間違いなく感じ取ることができるだろう。また、儒教などの東洋の思想伝統についても無批判ではなく、真の科学的精神の欠如など、その問題点についても深い洞察力をもっている。私が最近になってようやく読んだトゥールミンの著作を、田口先生がとっくに読んでおられると聞いた時は、正直に言って大変驚いた。田口先生が八十歳を過ぎた今もなお、これほど精進していることに、私は深い敬意を抱いている。

清朝の有名な学者である梅文鼎は、「法有可採，何論東西，理有所明，何分新舊」と言っ

たことがある。つまり、取るべき法則があれば東も西もなく、道理を明らかにする学問があれば、新旧の区別はないと言った。私は昔からこの言葉が好きである。一世紀以上西洋の衝撃を経験した後、自分たちの伝統をもっと冷静に見ることができるようになったはずである。もちろん、西洋文明の長所から学び続けるべきである。なぜならば、デカルトに代表される理性主義の伝統は私たちの伝統には強くなかったし、ことあるごとに「近代の超克」を語るべきではないが、西洋の学問や思想だけに主導される時代は確かに終焉を迎えつつあるはずである。